

卓 話

『新聞記者の裏話』

卓話者 岐阜新聞 編集局 報道部
副部長 久松 孝志 様



岐阜新聞を取っている人は？

新聞記者のイメージは…

「高い給料はもらっているが、休みがない」半分本当。いまや人気商売ではない。

誰にでも会いに行き、ひるまず真実に迫る、歴史に立ち会い、紙面に記録するという使命。

(東京時代の話。国会経験)

それぞれテーマを持つ。取材は1日限りのものではない。
紙面化されたときの喜びは格別。朝一にお礼、苦情の電話。

いわゆるスクープ

弊社最大のものとして、県の募金事件（2006年）、岐阜市の善商による産廃事件など個人的には岐阜商工会議所会頭報道。

警察時代、夜討ち朝駆け、寝てしまった失敗も多々。後のかみさんに乗っけて夜討ち。かみさんを置き去りに。

整理記者のやりがい。忙しい時ほど上がるアドレナリン、チャイムの連発。

ネット時代に岐阜新聞の存在価値を高めるための課題は山積。若者も文字には親しんでいる。SNSで誰でも発信できる時代。決して活字、文章がすたれたわけではない。新聞記者は何より裏どりを重視する。執筆も訓練を受け、15年以上の経験を持つデスクを経たもの。信頼感はクロスチェックによって保たれている。

かつて、私の意見は新聞の受け売りですといったCMがあった。それではない。あくまで意見を持ってもらうため情報提供である記事が必要。一方で今は主張も求められている。

新聞に求められているもの、掘り下げ、解説する力。さらに地元紙に求められているもの。

ともに生きてゆくための喜びを与え、ヒントを与える。岐阜新聞はずっとこの地で生きる。他紙とはそこが最大の違い。